

太陽 ASG 拝啓社長殿

経営者のための財務情報 第 444 号

この資料は全部お読みいただいて 100 秒です。

今回のテーマ： 為替変動、金融の調整とそのツケ —バブル経済

ブレトンウッズからプラザへ避けられなかったか日本のバブル発生

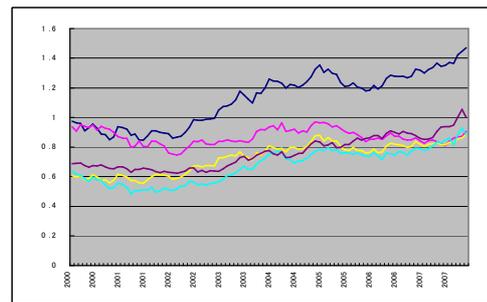
ブレトンウッズ体制の1ドル360円から金ドル交換停止（ニクソンショック）、円の切り上げ、変動相場制移行を経て、当時も貿易赤字に悩んでいた米国と、日本を含むG5諸国は1985年、為替協調介入のプラザ合意を発表。円は1年で1ドル240円から120円へと絶壁を登るように急伸し、輸出産業を中心とする日本経済は深刻な局面に直面しました。つぎの要因から、プラザ合意はわが国のバブル景気の引き金になったとされています（インターネット百科「ウィキペディア」）。

1. 米国債などドル建て資産に損失が発生、日系資本が為替リスクのない国内に向かった。
2. 円高打撃が予想された輸出業界救済のため金融緩和を実施、過剰流動性が発生した。
3. 金融緩和・低金利政策が国際公約と捉えられ、継続されるとの期待が強固にあった。

＜プラザ合意後の円・ドル推移＞単位：円



＜主要通貨の対米ドル推移＞単位：米ドル



データ：日銀マーケット関連統計より作成

円・ドル関係の収斂とユーロ上昇、円・ドル下落

為替相場は、短期、短中期、中長期と異なる動きを見せますが、プラザ合意後、対ドル円相場は1ドル80円台まで上昇ののち、振幅は次第に収斂しています（左図）。右図は2000年以降の主要通貨の対米ドル推移（単位：ドル、円は100円当り）です。ユーロ（紺）の大幅な上昇以外にも、各主要通貨スイス・フラン（茶）、カナダ・ドル（緑）、オーストラリア・ドル（黄）は米ドルに対して一様に上昇しています。円（赤）はこの8年間を見ると対米ドルで横ばいです。2001年をボトムにユーロ上昇、円・ドル下落、と言えます。米国は双子の赤字、日本は巨額の財政累積赤字と長期デフレのダブルパンチが下落の大きな要因と見てよいでしょう。

お見逃しなく！

ユーロはなぜ強い？

ユーロ圏各国の財政収支は、3%基準により各国がセグメントされた形で規制を受け、それが束になったうえ、それぞれが全体に責任を負っています。一方、世界第1、2位の経済大国米国と日本は、経済規模が大きいにも拘らず、ドンブリ勘定です。経済の陰の部分にライトが的確に当たりません。結束が続く限り、経営管理の観点でユーロの運営システムは断然優れています。

サブプライム問題の引き金も金融政策のつけか—神様グリーン・スパン氏の功罪も

ロバート・シラー（米エコノミスト）氏によれば、50年台から横ばいが続いていた米国の住宅価格は、株式市場とITバブルの引き金で90年台半ばから上昇し1.8倍に到った。主因は低金利と不備な貸し出し基準にあるとしています（米ウィキペディア）。在庫整理が進んでおり住宅問題は实体经济に影響がないとしてきたグリーン・スパン氏には、不良貸付・証券化問題は視野に入らなかったのか・・・